

Spine Dynamics 学術シンポジウム 2017 ルポ

集まれ全国のセラピストの仲間たち
新しい治療概念でパラダイムシフトを
相互啓発でさらに理解をふかめよう

未だ解決策が見いだされていない慢性疼痛。何が問題点であるのかを見いだすことが出来なければ、その対策を構築することが難しく、漫然とした理学療法を繰り返すことに繋がりがかねない。このような問題に対し、身体的側面のみならず、心理・社会的側面までを踏まえた理学療法を展開する全国の Spine Dynamics 療法セラピストから、今年も多くの情報発信が行なわれましたので興味深い内容をいくつかご紹介します。



【研究発表：胸郭・自律神経・筋緊張】7題

Spine Dynamics 理論をベースに自らが考案したポールエクササイズ（通称：森安ポール）を用いて、高校野球夏の甲子園で母校を13年ぶりの出場とベスト8進出をサポートされた森安先生から、「ポールエクササイズと身体環境の変化」について報告されました。結果が求められる現場で結果を残した手法は説得力が違います。森安先生には、休み時間にポールエクササイズの実演も行って頂きありがとうございました。



【研究発表：筋力、柔軟性】7題

このセッションでは、筋力と柔軟性の関係性について多く発表されていました。「剛性=柔性」「 $F_a = F_b$ 」「筋力=柔軟性」は、Spine Dynamics 療法の根幹でもあります。固定源がしっかりしていなければ、その他の駆動源は機能障害を生じ、結果として出力抑制が認められます。これらの関係性は、腹筋や WBI といった筋力と腰椎・骨盤周囲柔軟性という身体質量中心に関する報告が多く、やはりヒトが地球上で活動を行なうには固定源が重要であり、それは足腰が強いということに繋がるのではないのでしょうか。

【研究発表：脊柱、WBI】7題

「学力と WBI は相関するの？」の第2報が報告されました。学力と WBI は相関しないという、またも私の個人的な期待とは異なる結果が残念で仕方ありません（笑）。確かに、何らかの因果関係を見いだすことも重要なことですが、因果関係が認められないことも貴重な研究でありそれが真実なのです。大切なのは、日々の生活や臨床で常に疑問を持つこと、そしてその疑問を検証するのが学術活動であると再認識しました。



【経験発表：教育、報告、自律神経】8題

ファスティングを自らが行なった結果報告があり、実体験の報告は聴講者の多くが興味を持ち、今回のシンポジウムで一番質疑応答がなされた発表でした。これは私の非常に個人的な意見になりますが、セラピストは保険に守られ、自分が出来もしないこと・やったこともないことを平気で患者に提供する傾向があると思います。「言霊」という言葉があるように、言葉には魂が宿ります。難治症例ほどいかに行動変容が獲得できるかが成功の鍵であり、そのためには言葉に魂を宿すことができる人間力を身につけることが大切ではないでしょうか。実体験に勝るものはありません！



【経験発表：内科、精神、整形】

統合失調症、うつ病、認知症など、精神科領域においても **Spine Dynamics** 療法が功を奏した・変化をもたらした症例が報告されました。精神疾患にかぎらず、心理的な要因に対してもセラピストは敬遠しがちではないでしょうか。我々はカウンセラーではありませんが、身体に起こった症状は結果であり、その原因は精神領域である場合も多く経験します。運動器疾患に限らず、重力場における身体応答へのアプローチが様々な変化をもたらすこと証明してくれた勇気づけられる内容であったと思います。

～千里の道も一歩から～

「どんなに大きな事であってもまずは一歩を踏み出すこと、そしてその積み重ねが成功に繋がる」ということはご存じかと思います。**Spine Dynamics** 療法は脇元幸一氏が積み重ねるのではなく、清泉クリニックのスタッフが積み重ねるものでもありません。**Spine Dynamics** 療法に携わる者全員でその一歩を踏み出し、積み重ねるものだと思います。本学術シンポジウムが世界への情報発信に繋がり、その礎を担うのは皆さんです。共に切磋琢磨し、セラピストとしての道を、**Spine Dynamics** 療法の道を一步一步積み重ねていければと思う一日であったと実感しました。



4回目となる来年は新天地「広島」での開催です。まずは目の前の一歩から踏み出すことから始めてみませんか。多くの皆様の発表ならびに参加を期待します。

では、来年お会いしましょう！

嵩下敏文（医療法人社団 SEISEN）